動物童話

麒麟（ヂラフ）と野牛（バイソン）の對話

濱田格

バイソン（野牛）がアメリカから初めて上野の動物園に來た頃の事でした。

何しろバイソンは北アメリカだけにしか居ない動物で、日本では初めて見る珍らしい動物ですから、最初の間は毎日〳〵朝から夕方まで引つきりなしに一抔の見物人でした。それにバイソンの方も初めての場所ですからすつかり面喰つてしまひまして、毎日たゞウロ〳〵ウロウロばかりして居ました。

處が四五日もたつて、大分慣れて落ち付いて來た或日の夜明け方でした。まだ見物人は一人も參りません。バイソンは朝のすがすがしい風をからだ一抔に受けながら、のつそりと柵の眞ん中あたりまで出て參りました。

『さて、此處の動物園は一體どんな景色なのかな。まだゆつくり眺めるひまもなかつたぞ。』

なぞゝあたりを眺め廻して居ましたが、

『おやッ』

俄かにバイソンは吃驚して飛び上つてしまひました。

『ウワーッ。ありや何だッ！』

がつきりと四つ足を踏ん張つて、首を低く下げて身構えたのも無理はありません。筋向ふの廣い檻の中から、恐ろしく背の高い動物が、まるで電信柱みたいな長い首をぐつと伸ばして遙か上の方からバイソンを見下して居るではありませんか。バイソンは生れて初めてこんな細高い動物を見たのです。

『おい！そこに居る背高のつぽ！貴樣は一體何者だ！』

と大聲で怒鳴りました。

すると電信柱の先の顏がニコ〳〵笑ひ出して、

『私はヂラフ（麒麟）ですよ。初めてお目に掛ります。あな

たはバイソンさんでしたね。お早う御座います』

『おや〳〵。のつぽの割合にはひごく物優しいね。……僕は初めて君のやうな背の高い動物を見たものだから、今にも頭の上から飛びかゝつて來るんぢやないかと吃驚したんだよ。怒鳴りつけたりして失敬々々』

『はッははは……私は決して他の動物に飛びかゝつて行くなんて事は致しません。何しろ動物の中では一番優しいたちで、皆さんが私の事を『動物の紳士』だと仰しやる位ですからね』

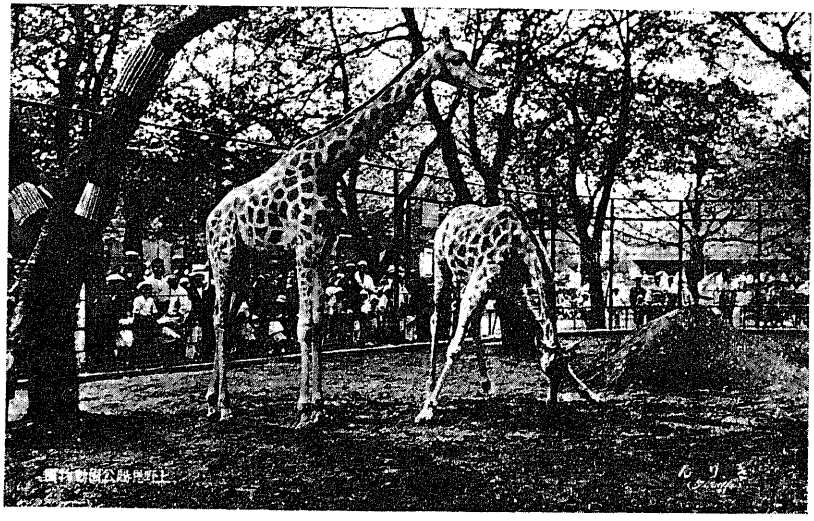
『成程ね。さう云はれて見ると君は見た處却々上品な紳士らしいな』。第一スラリと伸びたからだつきがとても上品だ。それに著て居る著物だつて何て美しいんだらう。黄色の地に美事な石垣型の黑い模樣が一面について居て。實に奇麗ぢやないか』

『そんなに褒められると恥かしくなりますね。……だけど私の尾の處から背中へだんだん高くなつて行つて、そのまま首へ頭へとスーッと斜に上へ伸び上つた線の美しさは、一寸自分ながら他に類がないだらうと自慢なんですよ』

『ほんとだ。まるで飛行機を射つ高射砲みたいだね。そこへ行くと、ごうだね僕の恰好は。色は黑茶の汚らしい毛がふさ〳〵生えて居るだけだが、ごつしりと固く丸まつた形は、まあ裝甲戰車(タンク)だなァ』

『全くタンクですね。首が思ひ切り太くて短かくて、もくもくと背中の方へ盛り上つた處なんか、何と强さうなんでせう』

『强いには强いさ。首の力ならライオンにだつて負けないつもりだ。いつだかアメリカの山奥の野ッ原で僕達が遊んでると馬に乘つた人間がどこからか不意に出て來てね、何でもカウボーイとか云ふ馬乘りと投繩のとてもうまい人間さ。それがいきなり投繩で僕達を生捕にしようとしたんだ。すると仲間の一匹がすつかり怒つちやつてね、かう云ふ工合に頭を地べたへすり付けるやうにして猛烈な勢で突擊したんだ。するとごうだらう、此のぐつと曲つた二本の大きな角に馬の横つ腹を引つ掛けたと思つたら、いきなりブーンとはね飛ばしたんだ。……驚いたね。人間を乘せたまゝで馬が十米も空中へ跳ねとばされて、二十米程先の地



べたへ叩きつけられてしまつたんだ』

『ほほう！すごい力ですね。……何て荒つぽい事をするんでせう。……だのにあなたは大抵地べたに寢そべつてばかり居て、いつもギッチラ〳〵何か口の中で嚙んで居ますね。チューインガムでも食べて居るんですか』

『チューインガム？、冗談ぢやない。いくら僕がアメリカ生れだつてチューインガムなんか食べないさ。僕は野原の草ばかり食べて生きて居るんだ。寢そべつて口をモグ〳〵やつて居るのは、あれは僕が反芻動物だからなんだよ。つまり一旦草を食べ始めると大急ぎで良く嚙まずに胃囊の中へどし〳〵嚥み込んでしまふんだ。そしてひまな時にゆつくりと又胃の中から口の中まで吐き出して、今度は充分よく嚙みなほして又胃の中へのみ込むんだよ。これを反芻動物と云つてね、牛も鹿もさうだし又……』。

『一寸待つて下さい。反芻動物と云へば、實は私も同じ反芻動物ですよ』。

『えッ？君も？驚いたなァ。その長い長い首でかい？……胃囊から口まで返つてるのに三日もかゝりさうだなァ……

それぢやなんだね、君も僕も同じ反芻動物ならつまり同類ぢやないか』

『さうですね。まァ兄弟みたいなものですね』

『いやこれは呆れた。こんでもない兄弟に廻り合つたものだ。さう云へば君の脚は一寸見には馬の脚ごさてもよく似て居るが、蹄が二つに割れて居る處は牛と同じだね。僕も蹄が二つに割れて居るんだから、これも同類だ』

『いよ〳〵兄弟ですね。高射砲とタンクなら兄弟でもいゝでせう』

『わッはッははは……兄弟にしては、ごうも似ても似つかぬ兄弟だなァ』

『しかし角はあなたと私と全く違ひますよ』

『ウム、ごうも違ふらしいね』

『あなたの角は本當の角で、牛や鹿などと同樣に別に生えて來る角でせう。處が私のは骨が突き出して居るので、ちやんと皮をかぶつて毛が生えて居るんですよ。だから本當の角ではなく、まァ云はゞ頭の飾ですね』

『なる程ね。道理で行儀よく二本眞直ぐに揃つて竝んでるこ思つた。それにしても君の首はごう考へても長過ぎやしないかなァ。そんな長い首を振り立てゝ歩き廻つたら、さぞ首がだるくなるだらうこ心配だよ』

『はッはは、、、……なァに生れた時からですもの、慣れつこになつて居ますから何ごもありませんよ。御安心下さい』

『さうかなァ。一體君の頭のてつぺんまで高さがごの位あるかね』。

『今の處四米半位のものですが、私は年がまだ五歳ですから、もつこ伸びるこ思ひますよ。私達仲間には六米もあるのがいくらも居るんですもの』。

『大したものだね。世界中で一番背の高い動物が君達なんだらうなァ』。

『さうです。でも高ければ高い程都合がいゝのです。生れ故郷では私達はいつもこんもり繁つた雜木林の中で暮して居て、木の葉や木の芽を食べて生きて居るんです。だから首が長くないこ高い枝の葉が食べられないでせう。高ければ高い程上の方まで達いて澤山食べられるわけですもの。

それから私の此の長い舌を一寸見て下さい。ほらね……』。

『何だ眞つ黑けの舌だね』。

『黑いけど長さは一尺程もありませう。これが又自由自在にぐちらへでもクル〳〵とひつくり返つたり卷きついたりするんです。これで棘(とげ)のある枝からでも棘に刺されずにうまく葉だけもいで食べられるんです』。

『だけど君、高い處はそれでいゝが、その首では地べたの草を食べる時困るだらう』。

『處が私は地べたの草は一切食べません。たゞ水を飲む時だけは、俯向かなくてはなりません。その時はほんとに閉口ですね。だから前脚を兩方に廣く開いて、それからぐうッと首を降します。さて水を飲んでしまつたら、やつとこさと又四米上まで首を持ち上げて兩方の前脚を引き寄せること云ふ事になるのです。だのに此處の動物園では見物の子供達がキャラメルなんかを投げ込んでくれるでせう。これを食べるのはこてもお憶劫なんですよ。折角投げ込んでくれたんだから拾つて食べないと氣の毒だと思つて我慢して食べますがね。困るんです。それに私はもと〳〵木の葉の樣なものばかり食べて居る動物ですから、飴でかためたキャラメルなんか食べ過ぎると直ぐお腹を惡くしてしまひます。柵の外にちやんと餌をやらぬ事つて札に書いてあるんですから、あれだけは止めて頂き度いと思ひますね』。

『さうだ〳〵。僕だつて草ばかり食べてる動物だらう。それなのに此の間なんか見物人が鹽せんべをやたらに投げ込むんだよ。そんな物僕達が食つたつてうまくもなんともありやしないから睨み付けてやつた。むやみなものはくれない方がいゝね。ツィ食べて見るとあこでお腹を惡くして困るよ。米を食べてる人間の子供に僕達の食べる枯草でも食べさして御覽、直ぐ病氣だ。同じ事ぢやないか。ねぇ君さうだらう』。

『全くさうですとも。慣れない物を食べるのが一番からだに惡いやうですね。……處でバイソンさんは此處の動物園では、どんな物を食べさして貰つて居るんですか』。

『僕かい。僕はこんなにからだ付きこそ肥つて居て荒らくれて居るが、食べるものは至つてお粗末ですむんだよ。燕麥(からすむぎ)と麩(ふすま)と乾草とで一日二貫目位、金高にして四五十錢

位のものさ。君は何を食べてるんだい』。

『私は隨分色々なものを貰つて居ますよ。乾草燕麥はあなたと同じですが、その外に馬鈴薯、人參、玉葱、アカシアの葉、木の皮、それからまだ牛乳とオートミルなんかです。何でも一日に二圓位かゝるつて云つてましたよ』。

『すごいね君は。飛んでもなく贅澤なものを食べてるぢやないか。牛乳からオートミルまで食べるなんて、どこまでも君はお上品な紳士樣だなア。そんなに色々うまい物を食べてる君は一體何處の產れなんだい』。

『あ、さう〳〵。私の生れ故鄕を申し上げるのを忘れて居ましたね。私の生れはアフリカの眞ん中あたりなんですよ。丁度サワラ大沙漠の南側の處で、チャッド地方と云ふ處があります。そこだけが私達の棲んでる處で、ずつと昔はエヂプトあたりにも居たらしいのですが、今ではチャッド地方だけしか居りません』。

『ふーん。そんな田舍かい。その割には奇麗で上品ぢやないか。……だがあの邊はライオンが出て來やしないかい』。

『時々現はれますね。どうかすると私共の棲んでる林の中なぞへ忍び込んで來て私達を食べようとするんですよ』。

『そんな時君はどうする』。

『そんな時に、此の長い首とからだの模樣と長い脚とが大變役に立つんですよ。第一背が高いから遙か遠方まで見透しが利きませう。だからずつと向ふからライオンがのそのそ近づいて來るのが直ぐ見付かるんです。すると私共は忽ち木と木の繫り合つた間へ眞直ぐに立つて、ヂッと動かないで居るんです。その時此のからだの模樣が例の保護色と云ふわけで、つまり、あたりの木や枝の影と同じ事に見えて、動きさへしなければ、チットも見分けがつかないので

す』。

『さうかなァ』。

『それでも、どうも危くなつたと思つたら今度は、此の脚で逃げ出すんです。御覽なさい、こんなに長い脚でせう、そりやとても早いのですよ。丁度競馬の馬が走るやうにギャロップと云ふ走り方で駈け出すんですが、走り始めたらもうどんな動物だつて私には追付けませんね』。

『さうだらうなァ。脚は思ひ切り長いし、その割に胴が小さくて輕いし、それにその長い首だつて丁度飛行機の支柱のやうに前と後がうすくとがつて居て風切りがいゝからなァ。僕なんかみたいに重つくるしくはないものね。……で、一體どの位の早やさで走るかね』。

『さうですね。一時間ざつと四十哩位の早さですね』。

『ウワーすごい〳〵。それぢや市内を走つてる自動車よりも早やいぢやないか』。

『ボロ圓タクよりはずつと早やいですとも。それに此の通りからだが細長いでせう。だから幅一米さへあれば木と木との間でも、自由にする〳〵かけ抜けて行けるんですよ。……あなたは走れますか』。

『そりや君にはとてもかなわないが、これでも案外早いんだよ。砂煙りを捲き上げて大平原を一直線に走る時は馬よりもずつと早いんだよ。誰でも僕の事を「野牛」だなんて牛の仲間みたいに云ふが、そりや仲間には仲間かも知れないが、僕はあんなにのそのそとはして居ないさ。ずつと活潑だよ。それから一寸自慢の出來るのは飛び上ることがとてもうまい事だ。此の丸々した重いからだで、と君は思ふだらうが、僕達の仲間には時々四米程も飛び上る力を持つてるのが居るよ。君の頭位だつたらピョンと飛び越すかも知れないね』。

『それは又驚いたものですね。やつぱり馬と人とを一緒に十米も跳ね飛ばす程の力があるからでせうよ。……私はとてもそんなには飛べない。でも此の脚の力だつて馬鹿にはなりませんよ。いつだか私の友達が逃げ損なつてライオンに追ひつめられてしまつた時なんか、こう〳〵最後の力を揮つたわけですね。いきなり前脚を高く持ち上げて續け樣にガンガン——とライオンの頭を目がけて叩きつけたんで

す。これをやられると大抵のライオンでも一度はひつくり返ります。するとその友達はライオンがごしんと尻餅をついた處を目がけて今度は後脚で馬みたいにガーンと力限り蹴飛ばしたんです。そしたらあなた、ライオンがウーンと云つたきり延びちやつたぢやありませんか。よく見るとライオンの横つ腹に穴があいて居たんですよ』。

『こりや驚いた。して見ると君達仲間はそれで居て却々强いのだね。それぢや僕の仲間が馬を跳ね飛ばしたのもあんまり自慢にはならないや』。

『いやそんなのは、餘程の時の事で、私達は大抵逃げてばかり居ます。それからもう一つ申し上げて置き度い事は私には聲帶が無いと云ふ珍らしい事です』。

『エ？聲帶？何だいそれは？』。

『聲帶と云ふのは、喉の處にある聲を出す器管ですよ。つまり肺から出す呼氣が此の聲帶と云ふものに當つてこれをふるわせて聲が出るんですが、私にはその聲帶がありませんから聲は一つも出ないのです。まァ啞ですね。だから大變物靜かで、餘計に人々が私をやさしい動物、上品な動物そして動物の紳士なぞゝ考へるのだらうと思ひます』。

『なる程ね。君は聲帶がないのか。……しかし上品で紳士らしい處のあるのは、どうしても本當だよ……だがどう考へても不思議だなァ……』。

『何が不思議ですか』。

『いや何、その、いゝかね。アフリカと云へば世界中での一番未開な野蠻な土地とせられて居る處だらう。そんな野蠻な處に君のやうな上品な紳士らしい動物が居て、あべこべに文明の一番進んでる處みたいに云はれてる北アメリカに僕みたいな、どう見ても野蠻で、飛んでもない暴れん坊が居るなんて……不思議ぢやないか』。

『はッはッは……さう云へばさうかも知れませんが、アフリカだつて、あなたよりもずつとひどい野蠻な暴れん坊の動物がいくらも外に居ますさ。……此次には何かそんな事でも話し合ひませうね。今日はこれで失禮致します』。

『僕もお腹が空いたから失敬するよ。さようなら』。

『さようなら』。

（終）